

■ 令和 7 年 9 月 2 日 厚生委員会県内調査

1 奈良県立藤の木学園〔奈良市菅野台 2－4 3〕

【調査目的】 フルオープンした奈良県立藤の木学園における障害児の支援の充実について

【調査概要】

会議室において概要説明を受けた後、入所児童の居住スペースを見学。

<説明の概要>

●登美学園（主に知的障害児を対象）と筒井寮（視覚・聴覚障害児を対象）の一体整備により、令和 2 年に開所した、奈良県が設置・運営する福祉型障害児入所施設。

●設置目的

- ・ 障害特性に応じたサービスの多様化 、 社会的養護の重要性を強く意識
- ・ 障害のある児童やその家庭を取り巻く状況に対応できる施設整備
- ・ 家族が安心して暮らすことができるセーフティネット機能の確保

●入所対象者 ※児童（18 歳まで）

- ①身体に障害がある児童
- ②知的に障害がある児童
- ③精神に障害がある児童（発達障害児を含む）
- ④児童相談所、医師等により療育の必要性が認められた児童

●入所について

「措置入所」：こども家庭相談センターが藤の木学園への入所相談のうえ入所

入所の理由：大半が虐待による家庭での生活困難

「契約入所」：保護者がこども家庭相談センターに相談のうえ学園と契約し入所

入所の理由：児童自身の特性等により家庭での生活が安定しないなど

そのほか、短期・日中一時利用のサービスや、一時保護の児童も受け入れている。

●支援体制

ユニットケア制（個別支援体制）の導入：

小規模な生活単位（ユニット）のもと、家庭的な雰囲気、児童同士の交流、個々の個性や生活リズムに応じて暮らしていける支援手法。各ユニットは玄関、居室、居室に近接するリビング・キッチン・ダイニング・サニタリーから構成され、リビングなどでは児童同士が交流している。性別や特性等に応じて、8つのユニットに分かれている。

●家族再統合にむけた保護者との関わり

- ・学園に入所しても、保護者との関わりが切れるわけではなく、週末、長期の休みなどには帰省も実施し、面会、外出も行われる。
- ・障害児入所施設には、虐待などの家庭環境上の理由で施設入所している子どもの保護者との連絡調整をし、家庭復帰や里親委託などを取りまとめ、こどもが施設を早期退所し、親子関係の再構築をはかれるように支援する、家庭支援専門相談員の配置基準が無いため、保育士・児童指導員ら直接支援職員がこの役割を担っている。

<質疑応答>

Q: 一時保護の概要について教えてもらいたい。

A: 県内の児童相談所から障害のある児童の受入の打診があり、藤の木学園内の体制等を考慮し、受入の可否を判断している。期間は2ヶ月だが、方針が決まらず延長となる場合もある。静養室等、藤の木学園内で空いているスペースを利用しており、入所児童との相性やケースによっては、一緒に生活をする場面もある。

Q: 入所児童数が減少傾向にあるようだが、何か要因はあるのか？

A: 入所児童数は減少傾向にある反面、短期利用のニーズは高まっている。家庭内で上手くバランスが取られている面があるのではないかな。

Q: 入所期間はどの程度か？

A: 入所の理由により、長引くケースもあれば、退所に向けた環境が整い、保護者等と連携しながら、18歳になるまでに退所となる場合もある。



2 明日香村国民保険診療所〔奈良県高市郡明日香村立部 7 4 5〕

【調査目的】 地域におけるかかりつけ医・総合診療医の役割について

【調査概要】

会議室において概要説明を受けた後、診察室を見学。

＜明日香村国民保険診療所について＞

- ・明日香村国民保険診療所は、指定管理者制度を活用した、公設民営の診療所である。
- ・開設当初は医師 1 名、看護師 1 名、受付 1 名と非常勤医師 2 名という小さな体制だったが、現在は常勤医師 2 名、非常勤医師 4 名、理学療法士や言語聴覚士を含む約 20 名のスタッフが在籍している。
- ・村の人口が減少しているにもかかわらず、1 日の患者数が開設時は 10 数人程度だったものが、徐々に増加し、現在は 40 人程度となっている。
- ・収益が出た場合には新しい医療機器を導入するなど、地域に還元している。

＜地域におけるかかりつけ医・総合診療医の重要性について＞

- ・かかりつけ医とは、風邪や軽い怪我の治療から、健康相談、在宅医療、看取りまで幅広く対応する地域の身近な医師であり、単に病気の診断・治療だけでなく、地域と人を診る総合診療医である。
- ・明日香村の住民の多くが大病院志向で、近辺の医大や眼科等の専門病院を「かかりつけ医」と認識し、診療科ごとに受診する人が多く、「かかりつけ医」への理解と認識向上が課題だった。
- ・「かかりつけ医」のもとでは、医療情報が一元化され、薬の重複した処方を防いだり、行政と連携して一元化された情報を共有することで、様々に役立てることができる。
- ・明日香村国民保険診療所では、訪問診療や多職種連携を積極的に推進し、高齢化が進む地域社会においても切れ目のない医療・介護サービスの提供を目指している。
- ・地域医療では、単なる病気の診察にとどまらず、人や地域全体を診る総合診療医の役割が極めて重要。「そうだ、診療所に行こう」をコンセプトに、赤ちゃんから高齢者まで幅広い世代の医療ニーズに応えている。大学病院が高度医療の百貨店に例えるなら、地域の診療所はコンビニエンスストアのように、身近で迅速な医療提供の場である。

＜地域医療の担い手の育成について＞

- ・奈良県は総合診療専門医が多い県として知られており、県では総合診療医の養成プログラムを様々な実施するなど、育成にも力を入れている。（市立奈良病院、天理よろづ相談所病院、大福診療所、奈良医大附属病院、土庫病院、南奈良総合医療センターが独自の養成プログラムを持っている）
- ・明日香村国民保険診療所も、奈良県立医科大学や自治医科大学から学生や研修医を受け入れ、地域医療の実践教育の場を提供し、次世代の医療人材育成にも力を入れている。

<質疑応答>

Q. 総合診療医とコミュニティナースはどういった関連性があるのか？

A. これからの医療は、病院に来る人だけを診ているようでは不十分。医療機関にかかりたくてもかかれない人を拾い上げてつないでいく必要がある。この役割を担うのが、コミュニティナースだと考えている。

医者には話したくないことでも、コミュニティナースには気軽に話せるという場合もある。そういった悩み等をコミュニティナースが拾い上げ、医療の現場と共有している。このように、総合診療医とコミュニティナースが協力関係にあるケースが非常に多い。

Q. 診療所において、どういった DX 医療の対応をしているのか？

A. 例えば、嘱託を受けている特別養護老人ホームで、月に 2 回オンライン診療を行っている。往診も行っているが、介護の現場では医療面で不安があり、オンラインでつながっていることで、施設のスタッフたちは安心して介護ができる。

DX 医療は、医療と介護の現場をつなぐ重要な要素になるので、これからも取り組んでいきたい。

